

論文二ノ五

銃砲業者ベンジヤミン・ファーマーと

軍需産業ファーマーIIゴルトン社

ーイギリスIIポルトガル通商の破綻

前方から甲高い少女の声が聞え、ファーマーにはどんな事態か判った。中庭で遊んでいたか、二階から落ちたのか、ひとりの子どものが、破壊する壁の下敷になったのである。叫び声の方向へファーマーは踏み込み。できるだけの近くまで地面を掻き分けた。どのように地上へ降りたのか、子どもの父と兄も現われ、ともに瓦礫を押し分けて、やがてファーマーの手に小さな顔が触れる。

第一節 銃製造業ファーマー・ガルトン社とイギリス・ポルトガル通商

リスボン繁華街で大地震に遭遇し、隣家の少女を救出したベンジャミン・ファーマーは、バーミンガムの銃製造業、ファーマー・ガルトン社の幹部である。ベンジャミンが取引するマスケット銃は、ヨーロッパにおける諸民族の攻防や、アジア、アフリカ、アメリカへの拓殖と堅く結びついていた。この銃器は一四一〇年フス戦争で最初に用いられたとされる。イギリスでは王国海軍の創設者とされるヘンリー八世は、一五四五年銃製造の技術を持つ数名のベルギー人を招聘し、彼らの同業組合をロンドン塔を本拠として結成させた。エリザベス女王の治世には三七名に鉄砲鍛冶の資格が与えられ、ロンドンの同業組合に銃製造の独占権が授けられる。①

一五四三年種子島でポルトガル人から入手した火縄銃は、点火方式の銃器、マスケット銃の一種である。この銃器の来歴については諸説あるが、ヨーロッパの技術を摂取して、南アジアで造られたとの見方が有力である。伝来から三二年後、千丁以上の火縄銃で装備した織田信長・徳川家康連合軍は、長篠の戦いで武田勝頼軍の騎馬隊を撃破し、天下統一への時代を切り開いた。

十七世紀にはスペイン等でマスケット銃の改良がなされ、撃鉄の先端にマッチ(火縄)ではなく、フリント(燧石)が装置される。このフリント・ロック方式の銃はまず盗賊などに愛用され、やがてヨーロッパ諸国の軍隊に調達された。一六八八年の名誉革命によって成立したメアリー二世の共同統治は、ルイ十四世の膨張政策に抗するたため、スペイン国王やドイツ諸侯と連合するとともに、国王軍の強化に努める。革命前に設立された軍需局は抜本的に再編され、性能の高いマスケット銃の開発によりとりわけ銃器の大量確保が図られた。② デ・ヴィト・ベイリの学位論文『軍需局と小型兵器供給―軍需機構一七一四年―一七八三年』は、こうした軍需局の役割と兵器調達についてきわめて精細である。

軍需局の機能をめぐりこの時期になされたもつとも重要な刷新は、小型兵器調達の構想全体のなかで、バーミンガム銃製造業に際立った位地を与えたことである。その事由は切迫した事態、イギリスがヨーロッパ(勢力均衡)を維持すべき急変のため、小型兵器への需要が激増したためである。オランダ総督オレンジ公ウイリアムが一六八八年にイギリスの共同統治者として迎えられたことにより、ヨーロッパ大陸の政情がここでも重要となり、連動する状況となった。

③ デ・ベイリ著『軍需局と小型兵器供給―軍需機構一七一四年―一七八三年』(一九八八年)

① ウオリックシャー州バーミンガムはイングランド中西部、ロンドンとリバプールの中程に位置し、鉄鉱と石炭の産地に近い。中世のたんなる市場町に、十六世紀以降は沢山の鍛冶屋や刃物屋が軒を並べた。つぎの世紀にはあらゆる金属製品、すなわち刃物、鋌釘、鋌前、鍋釜、農具、宝飾品などが製造され、産業革命の興起とともにやがてバーミンガムと近郊一帯は、ブラック・カントリと呼ばれる重工業地帯を形成し、文化的にもイギリス啓蒙運動の重要な拠点となる。④ この地域を際立たせる銃器の量産について、W・グリーンナーの著作『銃とその

① W.W. Greener, *The Gun and its Development*, New York, 1897. pp.49, 208.

② *Ibid.*, pp.66-67.

③ De Witt Bailey, *The Board of Ordnance and Small Arms Supply: The Ordnance System, 1714-1783*, University of London, 1988. p.29.

④ 大河内暁男著、近代イギリス経済史、岩波書店、一九七一年。四、一四―一五頁。

発達』はつぎのように述べる。

バーミンガムの銃製造工業を明確に確認できるのは、一六八三年からであつて、この年ウオリックシャー州選出のイギリス議會議員リチャード・ニューディゲイト従男爵は、政府からマスケット銃調達の権限を委託され、バーミンガムの鍛冶職人が当局と契約を結ぶよう、激励するとともに資金を援助した。この契約が認可されると、ロンドンの同業組合は憤懣やるかたなく、議会に異議を申し立てたため、「軍需局での再検討」が必要となった。しかし、バーミンガムの鍛冶職人は注文以上に銃を調達できる実力を発揮し、美事一カ月でマスケット銃二百丁を造り出した。

W・グリーンナー著『銃とその発達』（一八九七年） ①

一七〇一年スペイン継承戦争への突入を転機に軍需品への需要が激増し、バーミンガムでは炯眼な業者が金属製造から銃製造へ転進した。ファーマー家の銃製造も同市の中心、オールド・スクエアの近くで始まる。この区域はフランススコ会修道院の由緒ある遺蹟であつて、十八世紀初めこの広場には切妻、付柱、玄関など風格ある建築が、整然と十六棟配されていた。銃製造業の設立と発展はダヴィド・ウィリアムズの論文「ジェイムズ・フアーマーとサミエル・ゴルトナー一八世紀中葉における軍需省調達の銃製造の実情」で委細に考察されている。

ブリストルのクエイカー教徒ジョゼフ・ファーマーは、鋳物師から鉄砲鍛冶に転じ、一七〇二年バーミンガムの中心地オールド・スクエアで開業した。一七〇八年までに彼はまず軍需局への兵器完成品の調達者、ついで銃器・銃身の調達者となった。一七一七年から一七二〇年にかけて軍需局はロンドンとバーミンガムに小型兵器の二元的な供給源を設立した。

ジョゼフは意欲的に業務を拡張する。一七一七年彼はヴァージニアを訪れて、鉄鋳を調査し、一七二〇年三月には北米ポリテイモア諸州において溶鋳炉、鍛冶場、製鉄所に設置するよう、製鉄業者と合意した。同年彼はバーミンガムIIディグベスで工場を借り、釘鋳の製作所も造った。

一七二二年ロンドン銃製造業組合のウィリアム・ブレイザーは、バーミンガムのファーマーに「連射式銃」を売却し、業界に損害を与えたとして譴責を受けた。しかし、兵器業は好調である。軍需局へジョゼフ・ファーマーは一七二三年に銃剣式マスケット銃を一九〇丁納入し、一七二八年から翌年にかけてはマスケット銃身四四〇〇丁、銃発射装置を一五〇〇個調達する。この間に彼はオールド・スクエアの自宅を保持したまま、バーミンガムの新開地に業務を移転させた。

ダヴィド・ウィリアムズ「ジェイムズ・ファーマーとサミエル・ゴルトナー

一八世紀中葉における軍需省調達の銃製造の実情」（二〇一〇） ②

一七三四年ジョゼフ・ファーマーの娘ハンナは金属加工業者のロバート・ゴルトンと結婚し、この血縁を基盤として大手ファーマーIIゴルトン社が成立した。六年後オーストリア継承戦争の開始とともに、ジョージ二世治下の軍備も格段に強化された。この時期にジョゼフ・ファーマーは他の同業者、とくにエドワード・ジョルダ人と連携し、一万五千丁以上のマスケット銃を供給する。一七四一年に彼は世を去り、息子ジェイムズ・ファーマーが引続き軍需局調達者として認可される。③

① Greener, *op. cit.*, pp.208-210.

② David Williams, James Farmer and Samuel Galton, the reality of Gun Making for the Board of Ordnance in the Mid-18th Century, in *Arms & Armour*, Volume 7, No.2, 2010. p.120.

③ Williams, *op. cit.*, p.122.

相継ぐ戦乱のなかで軍需局の役割はとくに重視され、統率者である歴代の長官にはスペイン継承戦争の功労者、初代マールバラ公爵ジョン・チャーチルをはじめ、最高位の貴族が就任した。納入される兵器についても当局の審査はきわめて厳格であり、調達者の資格を付与された業者はきわめて少数である。ウィリアムスの史料調査によれば、一七二七年から一七五六年までの三十年間に銃身と発射装置の納入をつねに許されたのは、各々四企業にすぎず、戦時にもみ七企業ほどであった。彼の作成による軍需局納入一覧には、二百名に近い業者が列記されるが、その八割が軍靴など装備品の調達である。この一覧ではバーミンガムのジョゼフ・ファーマーが一七〇八年から一七四一年まで銃身と発射装置を大量したこと、その相続人ジェイムズ・ファーマーが一七四一年から一七五六年まで銃身や発射装置を納入したことが判る。さらに一七五六年から一七五七年までサミエル・ゴルトンの名義で、また一七五七年から一七七四年まではファーマー||ゴルトン社の名義で銃身や発射装置が調達されたことも明記されている。① なお、こうした名義の変更は、後述するようにリスボン大地震による被害の余波である。

十九世紀後半の著名な人類学者フランシス・ゴルトンはファーマー||ゴルトン家も末裔であり、K・ピアソンによる彼の評伝には父祖のジョゼフ・ファーマーやロバート・ゴルトンに関する叙述も見出される。リスボンで被災したイギリス人の多くはクエーカーと伝えられるが、ピアソンもとりわけそうした精神的側面に照準を合わせている。

ロバート・ゴルトンは本来プリストルの小間物屋であった。ファーマー家もそこで金物屋を営んだ。フレアム家はアルドゲイトの食品商であつて、のちに金銀細工師となつた。ブレインス家はウオッピングのタバコ屋であつたが、ホワイトチャペルやラトクリフではほかの品々も売り、パン屋や肉屋にもなつた。大抵は自営農民か地主の息子が都会へ来て、商売を始めたが、今日でも自営農民の次男三男が同じ道を選ぶ。クエーカーが宗教的な迫害を受けた時代にこうした事例が多く見られる。十七世紀後半にクエーカーの組織、キリスト友会の一員となるには、不倒の勇氣、ゴルトンの言葉によれば、「勇敢で質朴な一徹さ」が求められた。度重なる陥穽や服役に耐えて、商売を営み、家族を支えるには、さらに過度の勉強と耐久力が必要なのである。初期のクエーカーと同じく、近親結婚という原則で厳しく選別された彼らによつて、傑出した男女を輩出する家系が造られた。

K・ピアソン著『フランシス・ガルトン―その生涯、書簡、業績』(一九一四年) ②

これらの時代を通して軍需局の銃器調達を牽制したのは、アジアへの拓殖と交易を統率する東インド会社とアフリカ奴隷貿易を請け受ける王立アフリカ会社である。軍需局の注文には戦時か平時かによつて数量の大差があり、性能の検査もとくに厳重であつた。他方貿易商社との契約は買付の数量と納入の期限も変動が小規模であり、ロンドンの同業組合との軋轢もすくない。大西洋奴隷貿易を究明したジョゼフ・イニコリの大著『アフリカ人とイギリス産業革命』には、バーミンガムの銃製造業が綿密に分析される。

大西洋市場が西ミッドランドの金属工業から受けた影響は、ひとつの産業部門、銃製造業の歴史をともし明瞭に語りうる。この地域にあつて銃製造業は十七世紀後半に台頭した新規の産業にすぎない。しかし、十八世紀末にはとりわけバーミンガムとその近郊の主要産業となつたのである。銃製造という精密な作業のため、そこでは有能な熟練工が数多く雇われた。十九世紀の初頭ウエズベリの兵器産業では約千人の工員が雇用され、ダルラストーンでも六百人

① Bailey, *op. cit.*, pp.23-24, 264, 268.

② K. Pearson, *The Life, Letters and Labours of Francis Galton*, Cambridge: Cambridge University Press. 1914, pp.31-32.

以上が働いた。バーミンガムの大手銃製造業者が一七八八年に誌した証左によれば、十八世紀後半には小型兵器の量産のため、四千人から五千人雇われたと言う。(中略)

バーミンガムの主要な銃製造業者のひとり、ジョン・ウエイトリが一七八八年三月に商工会議所に提出した報告書を読めば、この産業部門における国外輸出と政府納入の比重は明らかである。「みずから営む銃製造業について熟慮すると、四千人から五千人がこの仕事で生計を立て、平時には九分どおりアフリカ貿易に支えられる。この商売がほかの商売と異質であるにもかかわらず、彼らの死活がこれに依存するからである。」ウエイトリの付言によれば、戦時には最良の職人が産業部門から募られて、政府や請負企業に雇われ、年間六万丁から七万丁の銃を製造できる。「これらの製品は当然性能に優れ、驚くほど迅速に造られて、低価格で納入されるが、常時銃製造業を支える方途はアフリカ貿易にほかならぬ。」

ジョゼフ・イニコリ著『アフリカ人とイギリス産業革命』 ①

バーミンガムの金属産業にかんする重要な史料のひとつは、同市の古文書館に蔵されるファーマー・ゴルトン文書とされる。この史料は一七五〇年から一八三〇年に至るファーマー家とゴルトン家の記録であつて、商業上の通信と個人的な手紙の手稿集成である。右に引用した著書『アフリカ人とイギリス産業革命』でもファーマー・ゴルトン文書が参照されるが、こうした蓄積を踏まえ、両家の銃製造を主題とする論文で、ウィリアムスはつぎのように述べる。

十八世紀を通じて銃製造業者はマニファクチャーでの量産によって奴隷貿易と他の交易組織、とりわけ東インド会社付属の軍隊をも銃器の販路とした。前者はときに三角貿易、アフリカ貿易、または大西洋貿易と呼ばれ、この論文では銃販売の目的からアフリカ貿易と表現する。研究者のイニコリとリチャードはファーマー・ゴルトン文書を調査して、バーミンガムの銃製造と金属工業にアフリカ貿易が与えた影響を論議した。アフリカ貿易からの恒常的で活発な需要は、七年戦争の直前、一七五一年から一七五四年までと一七九〇年代に最高潮に達する。これら需要の不均等によつて、好況時には労働力や原料、とくに石炭の確保が肝要となる。起業家と労働者、あるいは起業家間の紛争がこうした状況のもとでしばしば生じ、一七七二年に高姿勢のゴルトンは、商売敵のトーマス・ハドレイや他の起業家と係争し、市井の暴動すら誘発した。七年戦争など戦時には政府がアフリカ貿易からの需要を抑制し、悪しき方面へ武器が売られるのを、輸出の規制によつて妨害した。

ウィリアムス、前掲 ②

国内市場で個人的消費にため求められる多くの金属製品と異なり、銃器製造は軍需局への納入と海外への調達を主眼とする特殊な産業である。したがつて、各々の企業では関係諸機関との折衝が肝要であり、販売担当者の役割がとくに重視された。たとえば、企業主のジェイムズ・ファーマーは東インド会社や王立アフリカ会社と契約する一方、輸送船の確保のためリバプールに赴き、さらには大陸の諸都市で販路の拡大を試みた。こうしたファーマーの東奔西走がイニコリの大著で綿密に追跡される。

イギリスの銃製造業者は西アフリカへ直接輸出するのとは別に、アフリカ市場で銃の取引をする大陸の貿易商にも卸売をした。西アフリカで商売をするイギリスと大陸の貿易商双方に売り込むよう、もともと彼らは製造したので

① Joseph E. Inikoli, *Africans and the industrial Revolution in England, a Study in International Trade and Economic Development*, Cambridge, 2002. pp.457-458.

② Williams, *op. cit.*, pp.128-129.

あろう。こうした意図はジェイムズ・ファーマーとサミエル・ゴルトンとの書簡を読めばわかる。このふたりは銃製造を共同で営み、やがてファーマー・ゴルトン社を設立するのである。一七四八年から一七四九年にかけてジェイムズ・ファーマーは、みずからの製品を販売するため、ヨーロッパ北西の主要な諸都市を廻った。一七四八年十月に彼は、フランスのダンケルクからサミエル・ゴルトンへ手紙を送り、つぎのように書いた。「バーミンガム製作のあらゆる器具が大量に売れます。……ここにはアフリカへの航路がふたつあり、一方はアンゴラ行き、他方は黄金海岸行きです。……フランスのあらゆる港町の主要な貿易商を、私は紹介して頂きました。マルチニックとサント・ドミンゴへの船便が多数あって、大量の鉄器の輸送できます。私は雛形を送って、大口の注文を取り付けるつもりです。」

イニコリ著、前掲

①

さきに述べたピアソン著『フランシス・ゴルトン―その生涯、書簡、業績』には、これらの企業家について簡潔ではあるが、注目すべき記述が含まれる。ここでもピアソンはクエーカーの精神的特質に触れながら、ファーマー・ゴルトン社の事業が奴隷貿易と係わり、やがて金融業にまで変貌することを語る。アフリカ西海岸やカボ・ヴェルデ群島へ出向した銃砲業者は、奴隷商人にマスケット銃を調達するとともに、奴隷自体の売買にも関与したとされる。

クエーカーによつて大規模な商易が確立され、イギリスにおける金融業への関与もおおむね彼らの手中にあった。ここではそうした活力、根気、勉強を語るに止める。宗派の崇高な原則を彼らがつねに遵守したようには思われない。海賊船から身を護るため、銃器を輸送する商船と連携したとの理由で、ヨークシアアのキリスト友会会員は除名され、他方ゴルトン家とファーマー家はバーミンガムに銃器製造所を設置し、大量のマスケット銃を政府に納入した。しかも、彼らの商易は多岐に及び、リスボンでは巨大な取引を果たし、アメリカでは五万四千ホンドに相当する多数の奴隷を一度に売り渡した。サミエル・ゴルトンとテルチウス・ゴルトンの時代には、ファーマー家との共同については金融業にまで手を伸ばす。ゴルトン家をはじめ大抵の企業家は、田園での生活から町々の小売商に移り、さらには産業の新たな発展のもとで大規模な商易を企画する。こうしてクエーカーの特質が、彼らをつねに蘇生させた。

ピアソン著、前掲

②

第二節 ベンジャミン・ファーマーとリスボン大地震

ファーマー・ゴルトン社の幹部ベンジャミン・ファーマーは、同社の要務を担ってリスボンに滞在し、バイシヤ地区中核の鉄格子街で大地震に遭遇した。彼は創業者ジョゼフ・ファーマーの甥であり、現役の社主ジェイムズ・ファーマーの従弟に当たる。かつて創業者が兼務した渉外・販売の部門を、専任の幹部としてベンジャミンが担当した。

一七五五年ファーマー・ゴルトン社の事業はふたつの難題を抱え、今回のポルトガル滞在はそれらを打開するためであった。苦難の第一は同社の持船がカボ・ヴェルデ群島で押収されたことである。この群島はアフリカ西海岸から約五七〇キロ、ブラジル北海岸へは約三千キロの大西洋に位置し、一五世紀以降ポルトガルの植民地として奴隷貿易の重要な中継地であった。こうした海運の大半はイギリス貿易商の持船が担ったが、造船には莫大な経費を必要とし、運航においても荒天や海賊の危険が付き纏った。そのため個々の商船について十人から二十

① Inikoli, *op. cit.*, p.460.

② Pearson, *op. cit.*, pp.31-32.

人ほどの貿易商が共同で出資し、うち一名ないし二名が船舶管理人に選ばれたとされる。①

一七五四年の春ファーマー||ゴルトン社の幹部ベンジャミン・ファーマーは、大西洋航路の要地カボ・ヴェルデ群島でポルトガル官憲に拘束され、持船と積荷を押収された。翌年彼は英国外務省の添状を携え、再審と返還を要求するためリスボンを再訪する。外務省南方局長トーマス・ロビンソンによる添状は、ファーマー||ゴルトン社の提訴を支援するためであるが、三角貿易を推進するファーマーの軌跡をも具体的に示すので、その前半をここに訳出する

ファーマー||ゴルトン社の提訴に付する添状

イギリス外務省南方局長 トーマス・ロビンソン

一七五四年十二月十日

ロンドン・シテイに所属せるベンジャミン・ファーマーおよびトマス・チャンスは、カボ・ヴェルデ諸島へ出航するため、昨年一月商船一艘、さらには積荷として多量の商品と衣服・書籍を買い入れたり。また、あらかじめチャンスが同諸島へ二度赴き、西インド諸島などの市場に供するため、好適と思われる商品、すなわち畜牛、穀物、綿衣を購入した。同年三月二八日ファーマー、チャンス、ならびに船員多数はカボ・ヴェルデ諸島のひとつ、ブラーヴァ島に到着し、荒天により損傷した索具を三日間修復した。四月一日島民との交易が開始され、取引の数日密輸を取り締るべく、同島の総督、行政官、司法官が常時商船に乗り込み、夜は海辺で野宿した。

四月三日午前四時半頃船上に武装兵士三十人余りが駆け登り、寝室で眠る一同を逮捕した。禁制品リトマス買付の容疑で、彼らはフォゴ島へ連行され、リトマス協約巡視艇司令官フォルトソ・ロペスに引き渡された。かくしてファーマー、チャンス、および船員の大半が巡視艇に拘束され、翌日夜半チャンスを除く全員を船室に監禁して拷問を科した。かくしてファーマー、チャンス、および船員の大半は巡視艇に拘束され、翌日夜半チャンスを除く全員が司令官の船室に監禁された。そこにてロペスは点火したマッチを各人の手指に挟み、白状するよう拷問を加えたのである。その結果ファーマー以外の全員がロペスの指示どおり調書に署名した。②

カボ・ヴェルデ群島で^{だほ}拿捕されたのは、ファーマー||ゴルトン社専用の帆船であり、積荷のなかには銃器も当然含まれたであらう。右記の添文からも知られるとおり、海外での取引には食物や衣類も扱われ、ポルトガル官憲による拘束の理由が、意外にも染料密輸の容疑である。

一七五五年十一月一日リスボンに滞在したベンジャミン・ファーマーも、みずからの被災を記録に留めた。しかし、『ティモシイ・キドヌクスの証言』と題する主要な文書は、略歴を主体とした概要のみが公開され、三十頁以上にわたる本文は稀覯本として手稿のみ個人的に所蔵される。③ また、ベンジャミンの執筆と誌される小冊子もあるが、後述するように筆者はこれに多少の疑念を抱き、史料とするのを躊躇している。さきに挙げた稀覯本を、残念にも筆者はいまだ閲読できないが、この文書について研究者ペイスは、著書『神の怒り―リスボン大地震一七五五年』において大要を紹介した。著書全巻をとおして彼の読解と考証には高い信頼度が感じられ、以下ベンジャミンについてはペイスの記述に依拠する。

① L. M. E. Shaw, *The Anglo-Portuguese Alliance and the English Merchants in Portugal, 1654-1810*. Aldershot, 1998. pp.158-159.

② The National Archives SP 89/48/176 Folio 409 : 'Memorial of Messrs. Benjamin Farmer and Thos.

Chance, with regard to the ship Good Success' seized by the Portuguese at Cape Verde Islands.

③ Paice, *op. cit.*, pp. xiii, 268.

一七五五年の夏はファーマー家にとって快適な日々ではなかった。カポ・ヴェルデ群島で一艘の持船がポルトガル官憲に拿捕され、裁判所に返還要求を提訴しつつあった。また、リスボンにおける外国人協力者が巨額の負債を惹き起し、社主である従兄ジェイムズ・ファーマーが、共同経営者サミエル・ゴルトンの資産をも秘かに担保にして、必死に弁済の方策を模索していた。(中略)

リスボンに到着してベンジャミンは、同業のイギリス人貿易商の邸宅に寄寓した。中庭の向側を見上げると、グリーン連隊大佐の住居がある。大佐の長女がそこから見下ろして、ベンジャミンに微笑むように映じた。この地で彼が着手したのは社主ジェイムズ・ファーマー、ダヴィッド・パークレイ、リスボンの支店を支援するよう金融業者サム・モンタイトに、またポルトガル法廷への提訴を援護するようイギリス大使カストレスに懇請することであった。

エドワード・ペイス著『神の怒りーリスボン大地震一七五五年』(二〇〇八年)①

持船返還の提訴とともにベンジャミンに託された難題は、巨額な負債の処理である。この新規の事業は社主ジェイムズの指示によってリスボンでなされ、スコットランドの貿易商パークレイも関与したと思われる。パークレイ家は本来毛織物を取引したが、ロンドンの金匠フレアム家と姻戚関係にあり、さらに幾組かの婚姻をおしゴルトン家とも親密であった。金匠とは貴金属商が手形を発行して貨幣を預かる金融業であり、銀行の草分けと言われる。

十六世紀から現代に至るパークレイの家系総覧は、系図と略歴だけで四五〇頁を超える大冊であるが、ベンジャミンの記録に該当する記される人物はふたり見出される。パークレイ銀行創業者のひとり、ダヴィッド・パークレイがそれに当たれば、一七五五年には七三歳の高齢であるが、この家系は頑健な肉体でもよく知られていた。また、同名の息子長男ダヴィッド・パークレイであれば、当時二九歳の青年実業家であり、のちに北米の博愛的な経営者として令名を博し、ベンジャミン・フランクリンとも親交を結ぶ人物である。② なお、大地震発生の深夜貿易商トマズ・チエイズが、担ぎ運ばれつつ、王宮河港で見かけた「ジョルジュ・パークレイ(パークレイ)、右足を砕かれ、莫産のうえに横臥する知人」は、ファーマー＝ゴルトン社と係りのある在留者かも知れない。③

カポ・ヴェルデ諸島で自社の持船を押収され、返還の要求のためリスボンに来たばかりの貿易商、ベンジャミン・ファーマーは地震のとき多くの人たちと同じように、助けが来るのを期待して、住居の階段口へ避難した。中庭へ踏み込み、瓦礫の山に遮られた瞬間、わが名を呼ぶ声を聞いた。上を仰ぐと彼の隣人、連隊の中尉とその家族が梯子のない二階から跳び降りる構えである。当地で中尉の娘からいつも笑顔を示され、日々の楽しみになっていたが、いまや彼女は狂ったように瓦礫を指さし、ポルトガル語らしき言葉で激しく喚く。しかし、前方から甲高い少女の声が聞え、ファーマーにはどんな事態か判った。中庭で遊んでいたか、二階から落ちたのか、ひとりの子どもが、倒壊する壁の下敷になったのである。

叫び声の方向へファーマーは踏み込み。できるだけ近くの近くまで地面を掻き分けた。どのように地上へ降りたのか、子どもの父と兄も現われ、ともに瓦礫を押し分けて、やがてファーマーの手に小さな顔が触れる。そのとき軽度の震動がふたたび煉瓦や石材を中庭に降らせた。やむなく咄嗟に避難したが、地震が止むとすぐに再開し、ついに少女を救い上げる。彼女になんの傷痕もなく、ファーマーは後日つぎのように回想した。「わが子を腕に抱えた父親の表情

① Paice, *op. cit.*, pp. 58-59.

② *The Descendants of Alexander Barclay*, pp.5.

③ Thomas Chase, *An Account of What happened to Mr. Chase, at Lisbon in the great Earthquake, The Gentleman's Magazine*, volume LXXXIII, p.201.

は、いかなる筆墨でも描きえず、感極まる彼の語調も、表現に尽し難い。」その朝発生した一切の困苦が、娘の救出によつて父親の念頭から消えたのである。

ペイス著、前掲

①

リスボンで未曾有の災害に遭遇したベンジャミンは、危急に対処できる気力と経験を備えていた。少年の頃から俊敏と評された彼は、一七四五年スコットランドにおけるカロデンの戦いに国王軍のひとりとして出陣した。名誉革命を受け入れず、スチュアート朝の復活を目差す反乱はここで終結したのである。その後企業家に転じたベンジャミンは、旅先のポルトガルで山賊に人質として拉致され、生命を危くされたが、高貴な風采の人士に救護された。② 今回彼が寄宿し、少女を救出した地点は、おそらくリスボンの繁華街、大商人や金融業者が多く住む鉄格子新町あたりであろう。ペイスによる概要にはさらに市中の凄惨な様相が誌される。

昼下りバイシャ地区の大半は火焰に包まれていた。ファーマーは住居近くの小さな広場でも埋もれた人たちを救出し、もう立ち去つてもよいと判断した。沈痛な避難者の流れとともに、とぼとぼと北の方へ歩きつつ、彼は周りを見詰めた。だれの目もみな凝視しながらなものも捉えず、口は広く開いて不気味な呻きを発し、髪は乱れて逆立ちしている。そうした雰囲気のなかでファーマーは自身もまた同じ恐怖に憑かれたように震えた。

ペイス著、前掲

③

リスボンの震災は多くの企業家を破滅に追い込んだ。家具製造業者ジョゼフ・マイはすべての現金と貯蓄を喪失し、弟から四千ポンドも借りる羽目になった。ワインと織物の貿易商、ドンカン・クラークは七〇〇ポンドの商品と一八〇ポンドの現金を護ったが、二千ポンドの負債に至り、復帰を諦めた。また噂によれば、ブラジル産ダイヤモンドの取引業者、大手のブリストウ・ワード社は膨大な現金貯蔵を寸毫も防禦できなかった。同じく大手であるペリー・メリッシュ・デヴィス社はバイシャ地区の烈火を潜つて、ノーヴァ・ド・アルマダ街の経理事務所へ突進を試みたが、二度とも失敗したと巷間で囁かれる。そして、ベンジャミン・ファーマーが自社への支援を熱望した金融業者サム・モンタイグートはすべてを喪失し、もはや何事も期待できないと述べた。④ 以上のように実業界の被害を列挙するなかで、ペイスはファーマー・ゴルトン社についても言及する。

「神慮による鉄槌が」とウエルトシエア州の毛織物貿易商、ジョージ・ワンセイは日記に誌した。「我ら一家を打ち砕き、業務を破滅に追い込んだことか。」彼はリスボンに置いた商品と千ポンドもの債権を失っただけでなく、兄のウイリアム、貿易商投資協合理事のため債務を背負ったのでさる。この兄も震災によつて二万三千ポンドの債権をほとんど棒に振った。ロンドン在住のダニエル・ホイサードが破産したと聞いて、すでに積荷した四万五千ポンドの毛織物について売却の契約を無効にしたいと、ふたりの貿易商が南方開発局幹事ヘンリー・フォクスに訴えたが、徒労に終わった。そして、ベンジャミンの従兄、銃製造業者ジェームズ・ファーマーについては、すでに一七五五年の夏金融上の苦境にあつて、このとき決定的な打撃を受け、債権者と調停を余儀なくされた。

① Paice, *op. cit.*, pp. 73-74.

② Farmer Benjamin, *Some account of Timothy Quidnunc the author.* online.

③ Paice, *op. cit.*, pp. 109-110.

④ Paice, *op. cit.*, pp. 126-127.

一七五〇年国務尚書に抜擢され、宮廷の実権を掌握したセバステイアン・カルヴァリオ（のちのポンバル侯爵）は、自国産業の育成を重視し、イギリス勢力への抵抗を強化しつつあった。こうした路線の第一はブラジル貿易について英国商館から主導権を奪還し、自国民による特権会社を確立することである。金、砂糖、タバコなど主要な産物の取引が厳しく査閲され、一七五五年六月には商船隊をも有する貿易機関、グラン・パラ・マラニャン会社が設立された。② リスボンにおけるジェイムズ・ファーマーの投機破綻とカボ・ヴェルデ群島における大型帆船の拿捕は、おそらくポンバル政権の強硬な路線と係りがある。ウィリアムスの論文「ジェイムズ・ファーマーとサミエル・ゴルトン」にはリスボン大地震の余波が過ぎのように記載される。

一七五五年はジェイムズとサミエルにとって重大な年となった。諸国間の対立は七年戦争へと発展し、銃製造業者に繁栄の契機を与えたが、同年リスボンで投機に失敗したため、ジェイムズの経営基盤が完全に崩れた。その結果翌年三月に両者の提携が解消された。以後数カ月金融的な処理に多大の労苦が費やされたことが、彼らの書簡から読み取れる。こうしてサミエル・ゴルトンが企業の主導権を掌握し、業務の詳細を逐一手帳に記録した。

ウィリアムス、前掲

③

震災によってファーマー家は致命的な打撃を受けた。ジェイムズは銃製造業から手を引き、軍需局への武器調達についても翌年サミエル・ゴルトンに名義が変更される。しかし、大地震で多大の損害を受けたものの、多くのイギリス人貿易商がリスボンでやがて業務を再開した。衣料品や建築資材の大幅な需要が彼らを活気づけたとも言われる。ベンジャミン・ファーマーの責務である帆船拿捕への抗議も裁判が長期化し、彼もなお数年しばしばこの地に滞在した。④

震災からの復興を契機にポルトガルの社会は、歴史的な転換を遂げつつあった。リスボンの大規模な都市改造に着手した宰相ポンバルは、自国産業の保護・育成や啓蒙主義的な文化政策を推進するとともに、改革に批判的な政治勢力と宗教団体に容赦なく抑圧を強める。一七五八年国王への暗殺未遂事件が摘発され、最高位の貴族アヴェイロ公爵らが火刑に処せられた。これによってポンバルの独裁体制が以後二〇年間不動のものとなる。ペイス著『神の怒りーリスボン大地震一七五五年』の一文を参照する。

一七五九年六人の貴族と五人の平民が死刑の判決を受け、翌朝うち十人が市内を引き回されて牢獄からベレン王宮前の広場に移された。寒冷にもかかわらず八時三十分に集った膨大な群衆―市民全員とも七万人とも言われる―が、大地震以降もつとも噂の高い出来事を目のあたりにした。（中略）

カープ・ヴェルデ諸島での船舶押収に抗議するベンジャミン・ファーマーは、リスボンの司法当局に引続き補償を求め、救済措置の望みも皆無ではなかった。アヴェイロ公爵らが処刑された日、彼は丘陵への散歩の帰り道で、ベレンから首都へ戻る数多の群衆に出会った。群衆の歩みは遅く、眼差しは地を離れない。完全な沈黙が支配した。溜息ためいきと足音のほかはなにも聞えない。憤怒ではなく、底知れぬ暗鬱にだれの面持も覆われている。ファーマーはその光景に深い衝撃を受け、同じように暗澹たる情念を体験した過去を思いだした。かの大地震のとき、新造の埠頭が沈没し、

① *Ibid.*, pp.178-179.

② Kenneth Maxwell, *Pombal, Paradox of the Enlightenment*, Cambridge, 1995. pp.56, 59.

③ William, *op. cit.*, p125.

④ Paice, *op.cit.*, p.182.

首都低地帯も海嘯が脅かされたとき、同じような様相で群衆は丘陵へ退避したのである。

ペイス著、前掲。

①

初出 二〇一四年二月十六日
改編 二〇一九年九月十四日

② Paice, *op. cit.*, pp. 207, 209.